

石川依久子先生の国際藻類センター構想の再考

高知大学名誉教授 大野 正夫



石川依久子先生は、2015年5月29日82歳で、進行性の癌で急逝された。1933年生まれ。日本橋で過ごして、学童疎開を3年間もされて、その辛さをよく話された。東京教育大学を卒業されて、まだ女性研究者の道が厳しい時代に東京大学の水産植物教室の研究生になり海藻の研究を目指した。その後、米国で研究助手をして生活費を得て、修士課程を修了出来る制度で、

学会にて、右石川依久子先生（2007年）

クロレラを材料として修士号を取り帰国した。東京大学の医学部助教授の方と結婚されて子育てをしながら、東京大学応用微生物研究所でクロレラの研究をされていた。御主人が癌で急逝された後、二人の子育てをしながら研究を続けた。「人にはあまり言えないほどの清貧の生活だった」とほほ笑んでおられた。藻類分野の女性研究者の先達であり東京学芸大学の教授になられた。日本藻類学会の会長になられた時に、国際藻類センター構想を打ち出した。

私は日本海藻協会の事務局長として、石川先生の構想に賛同してこの企画に加わった。この経過報告は、以前日本藻類学会学会誌に記述したが、昨今、日本の科学技術研究レベルの低下、日本人の海外への留学生数、海外で研究する者が、中国、韓国、台湾より格段に少ないことが話題になっている。理研食品（株）の佐藤純一氏から、東南アジアのス食品コーナーを見ると、海藻食品が広い棚を占めているが、ほとんどは韓国と中国からの商品であり、日本の商品がないと報告があった。このような現状から、視点を変えて国際藻類センター構想を再検討したい。

近年日本の生物系の研究者でノーベル受賞した方々は、米国で職を得たか留学経験者である。戦後の復興前には大学を出て、国内に職がなく海外へ飛び出す者が多かった。「活路は自分で見つけて突き進まねば」という気迫があった。今の若い世代は、生きる路線を国内に求めて、海外に飛び出そうという活力がないように思う。

国際藻類センター設立構想は、1997年、先生が日本藻類学会の会長になられた年に、日本海藻協会とマリンバイオ・テクノロジー学会会長の宮地重遠先生に相談されて3団体で討議して構想が練られました。しかし石川先生のアイデアに沿った提案書であった。石川先生は、藻類（微細藻類と海藻）の一般社会への普及活動、研究活動の活性化と国際協力の3本を主な柱にした。そのなかでも一般社会への藻類の普及を重視し、藻類は動きがないので、自然の海を再現する大型水槽で魚介類を入れた水族館、多様な海藻製品の展示販売、レベル

の高い研究活動で、世界でどこにもない国際競争力を持つことを言われました。

石川先生は、海藻水族館の案を練るために、海藻を多く水槽に入れている鹿児島水族館に、一日滞在して海藻と魚介類が共存する自然の海を水槽内でどのように再現するか考えた。海藻は美しい物であり、故吉崎 誠先生と押し葉標本の芸術化などを討議された。現在の多くの水族館には、生きた海藻の森が作られており先生の構想に近づいている。

このプロジェクト実現を主導したのは石川先生であるが、宮地先生も多忙の時期に、このプロジェクトに奔走して下さり三つの候補を挙げた。

大阪府の候補は、天王山の海遊館に隣接する波止場で歩いて行ける。広い敷地に閉鎖した倉庫群があった。場所は海に面しており、倉庫の広さも充分すぎる広さだったが、改装経費が大阪府だけでは財政難で予算を組めない。センター運営費も難しいということで中断した。

次に上がった候補は、高松の高松駅と隣接した宇高連絡船波止場の跡地であった。高松市担当者は、ここに収容地となる施設を作りたいということで、水族館構想には乗り気であった。特に高松市には、モナコや沖縄の水族館の大型水槽をつくったアクリル製造会社があり、会社としてもこの構想に非常に興味を示し、社長自ら高松市の担当者と話し合いを持たれた。しかし、高松市の行政上層部の考えは、収益の上がる施設を目指しており、文化施設より複合商業施設を考えており、この構想は中断した。しかし現在でもこの区域に複合商業施設がなく空き地のままである。

次に候補に挙げたのは、沖縄の国連機関として建設が進められていた国際大学構想の一翼になることであった。宮地先生の御努力で副知事とも面談した。国連主導の国際性のある研究教育機関にする大学であった。一般社会への普及活動を入れたい石川先生の熱意にそぐわず、こちらから提案を撤回した。これらのプロジェクトの活動に費やした期間は8年間ほどであった。

その後、2007年の神戸で開催される国際海藻シンポジウムの開催にむけて、海苔、寒天、ワカメなどの養殖紹介の英語版のDVD制作作業などに追われて、国際藻類センターの設立活動は中断した。シンポジウムが終わった頃、石川先生の体調が悪くなり逝去されて、国際藻類センター構想は中断したままである。

国際藻類センター構想は、日本でしかできない事業であり藻類研究と藻類の普及活動の拠点作りにつながると思う。8年あまりの活動は、決して夢物語でなく、もう一歩というところで断念したものばかりであった。

現在、地域再生が、政府の主要な施策になっており、大学も地域との連携が叫ばれている時である。この構想を再検討する時期が来たと思う。一つの事例として高知県立牧野植物園を紹介しよう。この植物園は遺族から牧野富太郎の書籍を高知県に寄贈することで設立された。彼の所蔵書籍の量はかなりのものであった。高知県の行政は、来園数を心配して園内に地質館も併設した。

橋本大二郎知事が貧弱な施設を視察して、日本で誇れる植物園へ再編を提案した。東京都

立大学に保存されていた 40 万点とも言われる標本を全部引き取った。標本と書籍が揃って牧野植物園と彼は言った。植物園の広さは周辺が山地であるので、広大な面積を購入した。牧野植物園の広さは日本一である。しかも高知大学と連携して教授、准教授、助教の専任スタッフを置く研究室ができて、日本の第一線の優秀な研究者をそろえた研究教育機関になり院生達が共に研究をしている。園内に 200 名が入るホールと研修室がありイベント会場を併設している。展示は素晴らしい。日本が誇る植物園である。来園者は県内外から外国人観光客もあり、多くの人達が利用している。

海藻は日本の誇る産業である。日本の養殖技術が韓国や中国に渡った。日本が誇る海藻園センターができないであろうか。海藻産業界、大学機関と国・県の連携で、海藻王国の施設を作りあげてを提案したい。先の経験から、このような施設は日本の中央、東京湾に面したところに、水族館の拡充計画と海藻産業の紹介や研究教育を共にした海藻分野の総合施設を企画することを提案する。